

資 料

20世紀転換期アメリカ合衆国におけるM. P. E. グロスマンの
非定型児に対する教育の試みとその実体

吉井 涼

20世紀転換期アメリカ合衆国において明確な障害は見られないが、学業や行動において逸脱を示す非定型児に対して、私立学校を創設し教育的対応を行ったM. P. E. グロスマン (Maximilian Paul Eugen Groszmann 1855-1922) の教育の動機と私立学校の実態について検討した。グロスマンは、公立学校が混沌とした状態では対応し得ない非定型児のニーズを充足し、彼らの潜在的能力を高く評価し、社会の有用な市民として育成しようとした。さらに、グロスマンは、彼らの実態究明と教育モデルの開発、それらを社会へ提示することを目指した。グロスマン校では遺伝的に問題のある精神薄弱児を教育対象外とし、原因が遺伝ではなく社会や環境にある非定型児を教育対象としていた。非定型児には、寄宿制学校において、医師を含む教職員による身体的・精神的管理が提供されていた。

キー・ワード：M. P. E. グロスマン 非定型児 私立学校 アメリカ合衆国

I. はじめに

現代のインクルーシブ教育や特別支援教育では、従来の特殊教育が対象としてこなかった、様々な教育的ニーズをもつ子どもに対する適切な支援の提供が重要な課題となっている。今日の国際的潮流であるインクルーシブ教育では、障害のある子どもに加え、人種や民族、宗教、言語、貧困や不適切な家庭環境など、障害以外の多様な要因により、学習と参加に困難を抱える子どもに対する支援の必要性が認識されている。さらに、日本の特別支援教育制度においても、これまで教育対象とされてこなかった学習障害 (LD)、注意欠陥/多動性障害 (ADHD)、高機能自閉症などの子どもを、新たに教育対象として加えている。

しかし、こうした子どもたちに対する関心は、じつは現代になって初めて生じたのではない。20世紀転換期のアメリカ合衆国 (以下、アメリ

カ) では、明確な障害はみられないにもかかわらず、学業や行動に逸脱を示す子どもたちに対して、教育学的・心理学的な立場から公立学校とは異なるアプローチで教育的対応を試みた人物がすでに存在していた¹⁾。

M. P. E. グロスマン (Maximilian Paul Eugen Groszmann 1855-1922) は、急激な産業構造の変化や義務教育制度の実効化に起因する就学者の急増によって公立学校が混乱に直面していた19世紀末から、1910年代のアメリカにおいて、精神薄弱やてんかんなどの明確な障害はみられないにもかかわらず公立学校では教育成果が期待できない子どもの存在に着目し、自ら私立学校 (the Groszmann School for Nervous and Atypical Children, 以下グロスマン校) を創設して彼らの指導を試みた。彼の関心は、公立学校で膨大な数を占める「ほとんど正常だが、平均から少し外れていて、専門家による身体的・精神的・道徳的処置を必要としている神経質で非典型的 (atypical) な子ども」(Report of Commis-

筑波大学大学院人間総合科学研究科

sioner of Education [1916] 659) に対する科学的理解とそれを前提とする教育にあった。

グロスマンに関する先行研究は数少なく、クラーク大学時代の非行研究に言及したHawes (1971)、また、グロスマンによるexceptional childrenの分類を検討したRichardson (1999)、19世紀末から20世紀初頭のアメリカにおける公立学校特殊学級の設置と異常児²⁾概念の創出との関係を検討した宮本 (2005) が挙げられる程度である。しかし、これらの研究は、いずれもグロスマンを主たる研究対象とするものではないため、彼に関する言及はきわめて部分的にすぎず、彼の生涯や思想、グロスマン校における教育の実態については、これまでまったく明らかにされてこなかった。

そこで本研究は、グロスマンが何ゆえ非定型な状態をもつ子どもに着目し、彼らの教育の場として私立学校を創設したのか、さらに同校における教育の実態とはどのようなものであったのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究は歴史的研究であるため、精神薄弱等の歴史的表現を用いる。

II. グロスマン校創設の動機と経緯

1. 非定型児への関心の出発点としての少年非行研究と多様な状態を示す子どもに対する教育経験

M. P. E.グロスマンの生涯については、出生地をはじめその多くが不明であるが、ドイツ系アメリカ人であることと、1890年以前にクラーク大学において、児童研究運動 (Child Study Movement) で名高い初代総長G. S.ホール (G. Stanley Hall 1844-1924) のもとで、後に臨床心理学者となるG. E.ドーソン (George Ellsworth Dawson 1861-1936) とともに少年非行の研究に従事していたことがわかっている (Hawes [1971] 213)。グロスマンは、非行や犯罪は人間の進化の過程で生じる先祖返り (throwback) であるとの認識を示すとともに³⁾、その有効な予防策を厳罰よりもむしろ彼らの発達の促進と適切な教育環境に求めた (Groszmann [1911c]

300-315; Hawes [1971] 214-216)。こうした指摘には、C. R.ダーウィン (Charles Robert Darwin 1809-1882) に心酔し、個人の発達の過程を種の進化の過程と捉えたホール (宮本 [1998] 141) の影響がみてとれるが、グロスマンは、この時期の研究を通じて、学業や行動に逸脱のある子ども (deficient child) のための改善の場として、彼らに特化された学校設立の重要性を認識するようになっていく (Hawes [1971] 215-216)。

その後グロスマンは、1890年から1897年まで、ユダヤ教のラビであったS.アドラー (Samuel Adler 1809-1891) の子息であり、倫理協会運動 (Ethical Culture Movement) の創始者として知られるドイツ系移民の教育者・社会改革者F. アドラー (Felix Adler 1851-1933) が1880年に設立したニューヨーク市の倫理協会学校 (Ethical Culture School) に校長 (principal) として奉職する傍ら、1893年にはニューヨーク大学で博士の学位を授与されている (The New York Times [1922])。倫理協会学校は、労働者学校 (Workingman's School) の名称であった開校当初は貧困な労働者階層の子弟のための教育機関であったが (Klein [1977] 85)、教育方法の革新と校名変更により、1890年代初頭までには、あらゆる社会階層、あらゆる人種、あらゆる宗派の子弟を教育対象として、子どもの自主的な活動の促進と慣習や抑圧に妨げられない個性の発達を目ざす、新教育運動の実践の場として発展していく (Groszmann [1897b] 13-14; The New York Times [1893]; 木原 [1965] 18)。同校には、1893年の時点で幼稚園段階を含めて8学年に4歳から14歳まで350名の子どもが在籍していたが (The New York Times [1893])、グロスマンによれば、彼らはいずれも、何らかの点で特異的でexceptionalな状態を示す子どもたちであった。すなわち彼らは学業や芸術、手工に高い素質を示す子どもであり、学業不振であり、注意深い、あるいは注意力散漫の子どもであり、速すぎる、あるいは遅すぎる発達を示す子どもであり、難聴、近視、くる病、舞蹈病、リユー

マチ、てんかんなどの身体的欠陥をもつ子どもであり、盗癖、衝動性、怠惰などの行動問題をもつ子どもであった (Groszmann [1897b] 18-20, 32-37)。

1897年、グロスマンは病気を理由として倫理協会学校を退職するが (The New York Times [1922])、同校での実践経験によってグロスマンは、従来の研究や訓練が無効な子どもの存在と、彼らに対する個別的な対応の重要性を確信することで (Groszmann School [1907] 3)、クラーク大学時代以来の主張であった非定型的な状態を示す子どものための学校設立の意義について具体的な確証を得たと推測される。

2. グロスマン校創設のモデルとしてのドイツ・トリューパー治療教育施設の視察

倫理協会学校退職の後、グロスマンはバージニア州の農場で療養生活を送っていたが (The New York Times [1922])、このとき彼に対して、その後の人生を大きく決定づける提言を与えたのは、ドイツ系アメリカ人の小児科医N.オッペンハイム (Nathan Oppenheim 1865-1916) であった。彼はグロスマンに対し、神経質で特異的な (peculiar) 子どもの実験的な教育を行うよう提案する。後にグロスマンは、このときはまだオッペンハイムもグロスマン自身も、この事業の重要性を明確に理解していたわけではなかったと述懐している (Groszmann School [1907] 3)。しかし、オッペンハイムの提案がグロスマンにとって、学校創設を決意する直接的な動機となったことは、彼がその後間もなく、こうした子どもに対する教育の先例を求めて治療教育施設で有名なドイツのJ.トリューパー (Johannes Trüper 1855-1921) を訪ねていることから明らかである。

19世紀末のドイツの民衆学校では、同時期のアメリカと同様、都市化、産業化の急激な同時進行と貧困問題の深刻化を背景として学業不振児問題への対応が深刻な教育課題であった (荒川 [1988] 165-166)。こうした状況において、ドイツ児童研究の重要な推進者であったトリューパー (岡田・津曲 [1986] 47-49) は、1890

年、イエナ近郊に治療教育施設を創設し、神経系統や精神の欠損や衰弱が原因で、公立学校の課程についていくことができない子どもを対象として、彼らの特性や能力に即した治療的教育を実施した (富士川 [1909] 21-22; 岡田 [1993] 91)。グロスマンがなぜ、自らの学校のモデルをドイツのトリューパーに求めたのかは明らかでないが、トリューパー施設に対する当時の国際的な名声に加え (岡田 [1993] 93)、グロスマン校との教育対象の類似性、ドイツ児童研究がホールを介してもたらされたアメリカからの逆輸入であった事実 (岡田・津曲 [1986] 48)、さらにグロスマン自身もまた、倫理協会学校時代以来、児童研究運動に基づく教育の実践者であったことを考え合わせれば自然の選択であったと思われる。

こうしてグロスマンは、1900年4月1日、私財を投じて自らの名を冠した寄宿制の私立学校を創設した。彼に対し、学校創設にいたる決断と勇気を与えたのはクラーク大学時代の師ホールであった。グロスマンによれば、ホールは exceptional で特異的な子どもたちがもつ価値ある要素を指摘することで、彼の事業を励ましたという (Groszmann School [1907] 3-4; [1909] 3)。同校は当初、バージニア州の広大な果樹園に置かれたが、その後2度の移転を経て、1904年にニュージャージー州ブレインフィールドに定着する (Torek [1910] 13-14)⁴⁾。

Ⅲ. グロスマン校における教育の目的と対象

1. グロスマン校創設の思想的・方法論的根拠としての公立学校批判

それではグロスマン校の教育目的とはどのようなものであり、いかなる子どもが教育対象とみなされたのであろうか。

グロスマンによれば、グロスマン校創設の目的は、専門家による身体的・精神的・道徳的対応を必要とし、個別的なニーズを有する非定型的な子どもに対する観察と研究、訓練を通じて、彼らを有用な社会構成員として育成することであった (Anonymous [1912] 75-76; Groszmann

[1911a] 75 ; Groszmann School [1905] 3)。

非定型児はいずれも肯定的な価値をもつ存在である一方で、正常なバランスでの発達や成長を阻害された状態にあり、学業不振、奇妙、対処や指導が困難、過剰な緊張・興奮、過度の早熟や英才など、精神、意思、感情、そして身体における差異、逸脱、困難を多数もっている子どもであった (Groszmann [1904] 756)。もし適切な環境が与えられなければ、社会に対して破壊的な存在になる可能性を有しており、放置されれば大多数は怠惰、無能、無分別で無責任、奇行となる傾向があった (Groszmann [1904] 756 ; [1911a] 74)。

グロスマンにとって、彼らに対する最大の懸念は、こうした子どもは非行者として警察に補導されるか、浮浪者として放浪するまで社会的関心の対象にも保護の対象にもならないことにあった (Groszmann [1911b] 1071-1072)。グロスマンは、アメリカ国内の学齢児に占める非定型児や仮性の非定型児⁵⁾の割合を68%と示すことで、こうした子どもの数がいかに膨大であるかを指摘するとともに (Groszmann [1917] 8)、精神薄弱や明確な欠陥を示す子どもに対しては施設で適切に処遇されているにもかかわらず、こうした非定型的な子どもに対しては適切な対応が与えられないまま、無駄に時を過ごしていることを問題視した (Groszmann School [1905] 3)。これらの指摘からもわかるように、グロスマン校創設の背景には、クラーク大学時代以来、継続されてきた非定型児に対する研究的・教育的関心があったのであるが、次に述べるように、本来彼らの教育の場であるはずの公立学校に対する失望と批判もまた動機として存在していたのである。

公立学校に対するグロスマンの批判は、グロスマン校の創設期にあたる20世紀初頭時点には、非定型児に対する放置に限定されていたが、その後1910年代になると、公立学校における理念と現実の乖離を問題視するようになる。彼は、アメリカの公立学校がもつ本来の理念を高く評価していた。公立学校はアメリカの偉大な誇り

であり⁶⁾、宗派間の抗争や相互の不寛容を永続させる教区学校や、特定の富裕層の需要のみを充足する私立学校ではなく、あらゆる社会階層 (class) が集う公立学校の教育こそいかなる法律、命令、革命よりも、社会問題、政治問題、宗教問題を解決しうる民主主義の表現であったのである (Groszmann [1897a] 1-5 ; [1917] 1)。ところが、今日の公立学校は、伝統的で画一的な教育方法による大衆育成の工場と化し、個々の子どもの多様性や可能性を軽視して多くの怠惰、無能、非行を生産していると糾弾した (Groszmann [1911a] 77 ; [1914b] 406 ; [1917] 10)。

グロスマンの批判は、元来公立学校の対象外と見なされていた高い程度の痴愚児の入学によって、精神薄弱学級へと変容していた特殊学級にも及んだ。彼によれば、特殊学級の本来の対象は、非定型児や仮性の非定型児であるべきであり、特殊学級の機能は、彼らの精神的・道徳的状态を確認したのち、彼らを適切な環境に移すための観察クリニック (observational clinic) か、回復の見込みのある子どもに対する教育機会の提供かのいずれかに限定されるべきであると指摘した (Groszmann [1910a] 163 ; [1910b] 323)。

2. 科学的研究の重視とビネーシモン知能尺度批判

公立学校の実態に対するグロスマンの危機意識は、子どもの教育は様々な発達段階における子どもの自然的本性と子どもにとっての必要が基準となるべきであり、大人の方法を子どもに強要すべきではないとした児童研究 (松岡 [1982] 356-357) や、公立学校の画一性と硬直性を批判し、当時、世界的な学校改革運動として展開していた新教育運動の主張と共通する。実際、グロスマンが児童研究運動に対する支持を前提とし、公立学校には見出し得ないその理念をグロスマン校で実現しようとしたことは、創設に先立ち、当時のドイツにおいて児童研究運動の中心的存在であったトリューパーを訪ねていることや、前述の公立学校批判からも明ら

かであると思われる。

グロスマン校と児童研究運動との関連を指摘するいまひとつの根拠は、彼が同校の目的のひとつとして重視した子どもに対する科学研究である⁷⁾。彼は、「非定型児の教育は深遠な科学研究の問題」(Groszmann School [1905] 3)であるとし、同校の機能は「大部分が実験的な部門であり、特別な研究のための研究所としての性質を担っている」(Groszmann School [1907] 7)とした。

研究的機関としてのグロスマン校が求めた成果の一つは、非定型児に対する明確な基準の確立と診断方法の考案であった。グロスマンは、公立学校においては、多数の非定型児が曖昧な分類ゆえに欠陥児⁸⁾や異常児 (abnormal) とみなされ、彼らのもつ特有のニーズが充足されないまま不適切な環境に置かれていると批判した (Groszmann School [1907] 3)。さらに彼は、当時、アメリカに存在していたグロスマン校と類似の子どもを教育対象とする少数の私立学校に対しても、こうした学校では子どもに対する注意深い分類がなされず、子どもの状態やニーズが科学的に把握されていないと否定的な見解を示した (Groszmann [1904] 755)。

グロスマンが危惧したのは、多様な子どもや集団の分類に用いられる用語や基準の不明確さ、それらの恣意的な使用、さらに逸脱の程度を判断する診断方法の欠如にあった (Groszmann [1912a] 258-259; [1913] 767; [1917] 60)⁹⁾。「われわれにとって必要なのは、学校における子どもの位置の測定だけでなく、回復を裏付けること」(Groszmann [1917] 259)であるとするグロスマンにとって、診断方法の考案は、単なる子どもの分類ではなく、一人ひとりの子どものもつ差異を適切に把握し、必要な対応を決定するために不可欠の手段であった。

実際、グロスマンは1912年に子どもの知的な状態と発達可能性の測定方法を考案・刊行したが (Groszmann [1912a] 259; [1912b])、その一方で、1908年にヴァインランド精神薄弱者施設 (The New Jersey Training School for Feeble-

Minded Girls and Boys) の研究部門長であった H. H. ゴダード (Henry Herbert Goddard 1866-1957) によってアメリカに導入されたビネーシモン知能尺度に対しては否定的な立場をとった (Groszmann [1910c] 879; [1911b] 1075; [1912a] 259; [1912b] 3; [1913] 767; [1914a] 830)。ビネーシモン知能尺度に対するグロスマンの批判は、検査項目における言語能力の強調や、知能の測定には不適切な項目が含まれていることなどが主な理由であった。こうした指摘は、たとえば、ラッセル・セイジ財団のL. P. エアーズ (Leonard Porter Ayres) にも共通してみられるものであったが¹⁰⁾、グロスマンがもっとも問題視したのは、ビネーシモン知能尺度における精神年齢の算出方法であった。彼は、ビネーシモン知能尺度による機械的な算出方法では、質的な要素が考慮されないと指摘し、教育的診断においては検査結果の質的な要素こそが重要であり、ビネーシモン知能尺度は、検査によって発見される有益な事実の多くを無駄にしていると主張したのである (Groszmann [1917] 255-265)。ビネーシモン知能尺度は、多数の子どもを対象とすることで、信頼性ある結果が得られるかもしれないが、その結果は一方的かつ制約的であり、子どもを低く評価する傾向があるばかりでなく、そもそも尺度自体に根本的な欠点があることから、アメリカの子どもへの適用は困難であるというのがグロスマンの認識であった。

もっとも、宮本 (2005) によれば、1910年代半ばまでのアメリカでは、グロスマンに限らず、ビネーシモン知能尺度に対する教育関係者の評価は必ずしも芳しいものではなかった (宮本 [2005] 65-66)¹¹⁾。検査の妥当性や信頼性、遺伝による影響度、検査者の資質に加え、検査結果が個人の運命を決定づける目的で使用されることも問題視された (チャップマン [1995] 35-36; Wallin [1914] 214-215)。

3. 教育対象とその選抜方法

(1) 非定型児に対する教育可能性の期待と精神薄弱児の排除：すでに述べたように、グロ

スマン校の対象児は、「ほとんど正常だが、平均から少し外れていて、専門家による身体的・精神的・道徳的処置を必要としている神経質で非定型な子ども」(Report of Commissioner of Education [1916] 659)であった。では、実際に同校にはどのような子どもが在籍していたのであろうか。残念ながら、系統的な資料が欠如しているため、生徒数やその推移等の全体像を把握することは困難であるが¹²⁾、在籍した子どもの一部について、その身体的・精神的・道徳的状态を表す事例をTableに示す。

ここで注目すべき点は、精神薄弱児やてんかん児を入学対象から除外している点である。つまり、同校の対象児は学業の遅れや行動上の逸脱はあるものの、精神薄弱やてんかんではなかった。グロスマンは、当時のアメリカにおけるごく一般的な考え方として、精神薄弱児やてんかん児は、公立学校ではなく施設の対象であり、とくに精神薄弱児は真に教育はできず、社会の永久的な重荷であると認識していたのである(Groszmann [1910a] 162; [1912a] 260)。グロ

スマンは、当時アメリカ国内で大きな影響力をもっていた優生学を「新しく不完全」としながらも、「最も価値のある科学」とみなしていたから(Groszmann [1913] 769)、「明白な遺伝」である白痴や痴愚、聾啞といった欠陥が繁殖しないよう(Groszmann [1913] 768)、隔離的な環境におかれることは、彼にとって自然の発想であった。

その一方でグロスマンは、多くの非定型児は、遺伝的な精神の弱さや、先天的な劣等ではなく、病的な自意識と臆病さのために成長を阻害されていると考えていた。彼はこうした子どもたちがもつ正常への潜在的可能性を高く評価し「これらのすべての子どもは、人間社会において実際には肯定的な価値をもっている」(Groszmann [1911a] 74)とした。そして、たとえ彼らが現実には非行であり学業不振であったとしても、その原因は教師をはじめとする周囲の人々の無理解であり、彼らに適していない環境と指導の問題であると主張したのである(Groszmann [1906] 9; [1908] 37; [1910a] 166; 宮本

Table グロスマン校に在籍した子どもの実態

名前	身体的状態	言語発達	知的発達, 学業の遅れ	性的異常, 道徳的状态	その他
G.S. 15歳 男	左利き。年齢以下の身体的発達。疲れやすい。筋肉の不足のため視野に欠陥。遠近感の欠如。視覚と聴覚の記憶期間の制限	吃音	学業不振	性的に未発達	病的に火を怖がる。陰気で憂鬱。かんしゃくを起こす
R.F. 17歳 男	良い外貌。平均以上の身体的発達。バランス感覚の損傷。視覚的・聴覚的記憶に欠陥がある。記憶内容が不適切	言語は堪能。口述での情報再生は良好	一見知的で、平均的な能力あり 思考を記述で説明する能力に問題がある	包皮肥大と性的悪習。陰核切除手術を受ける 悪い習慣と望ましくない仲間を持つ。非行	子どもらしい情愛がない。成功のために、多くの時間と試行機会が必要。手工と芸術の表現方法は明確に未発達
L.D. 17歳 半男	平均以上の体重と身長。平らな胸。右肺に水泡音。両腎部に静脈瘤。性器の発達に異常を示す(過成長のペニス、未発達の睾丸)。同性愛により漏斗状の直腸になり慢性の便秘	言語は2歳を過ぎてからゆっくりと不明瞭に発達	学業不振	子どもの頃からマスターベーションを行う。同性愛。性的倒錯	葬儀に異常な関心を持ち、棺に入れられたいと話す。扱いにくい。無能。自殺傾向がある
D.T. 20歳 男	明白に未発達。視覚的・聴覚的記憶に欠陥がある		学業不振、洞察力に優れている	食料品、宝石、金銭の価値を理解していないが盗癖がある	大食い。吐くまで食べ続ける。野蛮人的特徴がある

出典) Groszmann [1917] 243-247

[2005] 59)。

(2) **対象児の選抜方法**：それでは、グロスマン校では具体的にどのような方法で、対象児を選抜していたのだろうか。同校では、トリューパーの治療教育施設で使用されていた調査項目を部分的に参照しつつ、これに独自の項目を加えたものを入学可否の判断基準として用いた (Groszmann [1912b] 4)。調査の内容は、「逸脱の原因」、「身体的状態の経歴」、「身体的状態に関する数値」、「機能的状態に関する数値」、「道徳的状态」、「特性や習慣」、「精神的状态」、「全般的状況」の8項目に大別され、詳細な把握を目的として各項目に10～30の質問項目が設定されていた (Groszmann [1912b] 11-21)。調査の結果、もし入学の可否について即決が困難な子どもがいた場合には、その子どもは全米特殊児童研究教育協会 (the National Association for the Study and Education of Exceptional Children: NASEEC)¹³⁾ の観察クリニック¹⁴⁾ に一時的に措置され、そこでさらに詳細な検査を受けた (Groszmann [1912b] 4)。

同校では、妊娠から現在に至るまでの子どもに関する詳細な情報を、両親に提示させた。入学調査は、遺伝的関心から、両親や兄弟はもとより、祖父母も対象となり、質問内容は、人種、職業、生年月日、出生地、生存、死因、死亡時期、病気、気質、血縁関係にまで及んでいた (Groszmann [1912b] 4-21)。

こうした子どもや家族に対する調査は、同時期の公立学校でも同様に行われたが¹⁵⁾、公立学校ではグロスマン校のような遺伝的関心や祖父母にまで及ぶ詳細な項目は見られなかった。

IV. グロスマン校の実態

1. 教育の内容と方法

グロスマン校では、教育の内容や方法は、機械的に決定されるのではなく、入学後の子どもの発達や状態の改善に合わせて、適宜、修正と整理がなされるなど、子どもがもつ特別なニーズを充足するため、一人ひとりに注意深い配慮がなされていた (Groszmann School [1905]

16; Report of the Commissioner of Education [1916] 659)。

こうした配慮の理由には、「自分のニーズと合致しない環境下に置かれる」ことが、子どもにとって「精神的・道徳的に誤った活動習慣の獲得の原因となる」という、グロスマンの確信があった (Groszmann School [1905] 20)。

グロスマン校では、子どもが興味や楽しみをもてる訓練が理想とされたが、そうした考え方の背景には、非定型児は注意力や注意の維持が困難であるとのグロスマンの認識があった (Groszmann [1906] 4)。

同校における教育の内容は、通常学校と同様の教科教育に加えて、手工訓練、美術、園芸、体操、戸外での遊びや運動、さらに博物館や工場、公園への遠足や散歩といった校外活動により構成されていた¹⁶⁾。特に教科教育については、「健康な発達を阻害することがない」程度の内容の習得が目ざされた (Groszmann School [1905] 16)。

また、グロスマンは、筋肉の運動 (motor exercise) を精神と道徳の基礎と認識していたから (Groszmann [1906] 8; [1908] 36)、同校では手工訓練や芸術活動、園芸など実際的な内容の学習が、子どもの知的発達を促進する手段として教科教育よりも重視されていた (Groszmann School [1905] 16)¹⁷⁾。

2. 身体的・精神的状态の管理

グロスマンは、身体的な症状が精神的欠陥を示し、精神的な症状は生理学的機能の妨害を示しているとの考えに基づき、身体と精神の関連を重視した (Groszmann [1910c] 878)。子どもの危険な状態は教育方法の不備を示すものであり (Groszmann [1910c] 875)、注意深く包括的な身体的・心理的検査を定期的に繰り返すことで、個々の子どもに適合した処置の基礎が形成できるというのが彼の確信であった (Groszmann School [1905] 12)。

それゆえ同校に入学した子どもは、就寝、入浴、食事、訓練などの日常生活に対する詳細な観察に加え、あらゆる身体的・精神的発達の特

徴が、定期的な間隔で記録されていた (Groszmann School [1905] 12-13)。彼らに対しては毎月、身長や体重、胸囲といった基本的な項目に加えて、栄養状態や反応状態、筋肉の協調性 (motor co-ordination)、足の状態を記録する身体検査が実施されたほか、年に2回、訪問医 (visiting physicians) によって、目、耳、鼻、口などの器官から、胸、背骨、腹の奇形、そして生殖器までに及ぶ詳細な検査が実施された。これらの検査は生徒全員に対して行われ、状態が複雑で深刻な子どもには、同校の顧問医 (consulting physicians) によって、骨や筋肉、感覚器官に関するより詳細な形態的・生理学的検査 (anatomical and physiological examination) が実施された (Groszmann [1912b] 4-5)。

グロスマン校では、さまざまな分野の専門医を顧問医として配置することで、子どもたちの身体的・精神的状態に対する詳細な把握と管理を実現した (Groszmann School [1907] 15)。同校には、神経科、外科、整形外科、内科、皮膚科、眼科、耳科、喉頭科など、少なくとも16名の専門医が顧問医として携わっていたが、その中にはかつてグロスマンに私立学校創設のきっかけを与えたオープンハイムや、倫理協会学校時代にグロスマンと共同で生徒の身体的状態の管理システムを開発したF. J. A. トレック (Franz J. A. Torek 1861-1938) をはじめ、数名のドイツ系医師も含まれていた (Groszmann School [1905] 15; [1907] 15)。彼らがいかなる理由から、グロスマン校に携わっていたかは不明であるが、欠陥のある子どもの訓練は、医師と教育者の共同作業であり、医師との連携によって多くの有益な情報がもたらされると考えていたグロスマンにとって (Groszmann [1906] 1; [1910a] 161)、彼らの存在は同校の教育の根幹を支える重要な存在であった。

さらにグロスマン校では、子どもの身体的・精神的状態に関する一連の記録を管理する方法として、カード管理制度 (card catalog system) を導入する。この方法は彼が倫理協会学校時代、前述のトレックとともに開発し、同校に導入し

た医学的指導監督制度 (the system of medical supervision) と呼ばれるシステムの援用であった (Groszmann [1897b] 18-19; Groszmann School [1905] 12, 15)。

3. 教職員と家庭的雰囲気重視

グロスマン校の職員には、医師の他に、校長であるグロスマンと、人数は不明であるが、教師、助手、介護人、看護婦、そして寮母などが含まれ、彼らはいずれも特別な訓練を受けていた (Report of the Commissioner of Education [1916] 658)。こうした職員により、同校の子どもに知的な監督と保護を確保していた (Groszmann School [1905] 13)。

グロスマン校では、家庭的な雰囲気が尊重された。たとえば、食事の場所は大規模な食堂であったが、子どもたちは小さなテーブルごとにグループを作り、また各テーブルには1人か2人の教師が配置されていた (Groszmann School [1905] 12)。さらに、日常生活の場は、大部屋ではなく、1人か2人用の個室が理想とされていた (Groszmann [1917] 506)。

なお、こうした家庭的な雰囲気の創出は、グロスマンが訪問したトリューパーの治療教育施設や、ニュージャージー州ヴァインランド精神薄弱者施設のような精神薄弱児者のケア・治療・養育・扶養・教育を目的とした施設でも同様に見られたことであった (富士川 [1909] 107-108, 138; 本間・高野・宮内・長塚・佐々木 [2007] 43)。

V. グロスマン校の成果と限界

1. 教育成果と限界

それでは、こうした教育的対応を通じて、グロスマン校の子どもにはどのような改善がみられたのであろうか。グロスマン校に入学した子どもたちの一部には、同校での教育を通じて、状態の改善や発達が見られた。たとえば、同校に2年間在籍した15歳の男子の母親は、グロスマン宛の書簡の中で、「入学時息子は憂鬱で遅れていて、貧相に発達した身体でしたが、いまや幸せになり、すべての面で野心に満ち溢れて

います」(Groszmann [1917] 244) と述べている。さらに、1910年のグロスマン校10周年記念誌の冒頭には、卒業生による祝辞が掲載された。彼女は、同校での教育に満足しており、同校での教育を通じて個々のニーズを把握する重要性を理解したことから、現在は自らも教師を目標として勉強中であると報告した。彼女によれば、彼女の同級生で、同校による教育効果がなかった生徒は一人もいなかったという (Matzner [1910] 5)。

とはいえ、なかには、進歩や発達がその後維持されなかった子どもも存在していた。たとえば、17歳半の男子は、入学前の状況と比べれば、在学中は進歩がみられたものの、後に非定型的な状態が再発し回復に失敗しており、グロスマンはその要因として、入学年齢の高さを指摘している (Groszmann [1917] 246)。

入学年齢が高いことによる教育の失敗は、グロスマンにおいて、親の無知に対する懸念を裏付けるものであったと思われる¹⁸⁾。彼は、非定型児の両親は、後述するように貧困層に属しており、彼らは通例、子どもの教育のために必要とされる知恵や訓練が欠如しており、無知で、伝統的な偏見があると述べている (Groszmann [1910a] 165; [1910c] 875; Groszmann School [1907] 14)。こうした現状に対し、彼は、州や地方自治体の権限の強化を主張し¹⁹⁾、さらに広報活動の活発化を主張している (Groszmann [1912a] 261; Groszmann School [1907] 14)。

また、グロスマンの開発した検査法について、1800年から1940年までのアメリカにおける精神薄弱教育を概観したE. E.ドル (Eugene Edgar Doll) は、「彼自身の教育計画の基礎として役立つ心理的諸機能の精密な検査を含んでいた」として高く評価しつつも、「結果を量化することを拒否したため、心理-教育学的に思考していくという方向を見失った」と述べ、その限界を指摘している (ドル [1969] 65)。

2. 財政的制約と全国組織の結成

すでに述べたように、グロスマン校の目的は、同校に在籍する非定型児の状態の改善に加え、

アメリカ国内に膨大に存在する非定型児の処遇問題を解決するため、彼らに適した教育的対応のモデルを広く提起することにあった。では、グロスマンは、いかなる方法によって、このような研究的機関としての意義を実現しようとしたのであろうか。

それを明らかにするためには、1905年3月に結成され、グロスマン校の運営を継承した全米特殊児童研究教育協会 (the National Association for the Study and Education of Exceptional Children: NASEEC) が重要となる。というのも同協会には、創設当初から同校が直面しつづけた財政問題の解消とともに、活動の全国的拡大が期待されていたからである。

グロスマン校の財政状況については、体系的な会計資料がないため詳しい状況の把握はできないが、創設当初から財政問題に直面していたと考えられる。というのも、グロスマン校は私立学校であり、基本的な財源は授業料であったが、トレックによれば、実際に同校の教育対象となった子どもの親は、その多くが経費を負担できない貧困層であった (Torek [1910] 14)。こうした状況に対しグロスマンは、個人資産を投じて子どもを受け入れ、さらに子どもの人数に応じて自身の給料をも削減していた (Groszmann School [1907] 15; Torek [1910] 14)。

こうした経済的苦境を打破し、学校運営を安定させるべく、結成されたのがNASEECであった (Torek [1910] 14)。とはいえ、財政問題の解消を目指したNASEECが結成されたことで、資金不足の問題が即時的に解消されたわけではなかった。1910年のNASEEC会長であるトレックは、グロスマン校ならびにNASEECの厳しい経済状態について言及し、NASEECの事業のひとつであるexceptional children問題に関する調査結果や研究結果の広報活動が、資金不足のために満足に行えていないと指摘している (Torek [1910] 16)。また、1911年のNASEEC会長であるA.E.シュミット (A. E. Schmitt) も、財政難のために現在の教職員数が不十分であることを懸念している (Schmitt [1911] 6)。

グロスマン校と同協会における財政的制約は、同校の広報活動や、校舎の修繕、教職員の増員を困難にしたことで、グロスマンによる事業の限界を表している。しかし、同協会は奨学金制度を導入し、研究的機関としてのグロスマン校の推進に貢献した (Groszmann School [1909] 24)。さらに、カリフォルニア州、オレゴン州、バージニア州、ジョージア州の4州と、ワシントンD.C.に、研究と教育活動の拠点、そして同校での研究成果を全国的に発信する拠点として、同協会の委員会が設置される (Groszmann [1914c] 843)。こうしてNASEECは、グロスマンの私的な事業に過ぎなかった非定型児に対する教育を全国的な事業へと発展させたという点で重要な意義をもつものであったといえるだろう²⁰⁾。

VI. おわりに

グロスマンは、明確な障害がみられないにもかかわらず、心身の状態において何らかの逸脱をもつ非定型児を対象として私立学校を創設し、彼らの実態に対する個別的な指導を通じて、こうした子どもの実態究明と教育モデルの開発を目ざした。

グロスマンが非定型児の教育に着手した背景には、自身の研究活動や教育活動に基づく、身体的・精神的・道徳的に多様な実態をもつ子どもの認識、および彼らに特別な教育の場と個別的な対応が必要であるとの確信があった。

彼は、既存の公立学校制度を伝統的で画一的であるとして批判する一方で「仮に子どもが進歩していなくても、それは子どもの失敗ではなく、教員や学校の失敗である」(Groszmann [1911a] 77) と考え、混沌とした公立学校が対応し得ない非定型児のニーズを充足し、医師を含む教職員による身体的・精神的管理によって、彼らを有用な市民として育成しようとしたのである。

さらに、グロスマン校では、非定型児の実態究明と教育モデルの開発、そして社会への提示といった研究的機能が意図された。実際に同校

では、exceptional childrenの分類、知的な状態と知的発達可能性を測定する検査法、子どもを管理するシステムが研究、開発された。しかし、こうした成果の一方で、同校は常に財政的事由による事業の制約に直面し続けた。

グロスマンは、自身の私立学校に在籍する子どもに対し、個別性を重視する診断と教育実践で一定の成果を収めたものの、それを非定型児全体に通じる教育モデルの開発にむすびつけることはできなかったのである。そしてその要因として、グロスマン校が直面した財政的制約と、ドルが指摘しているように、結果を数量化するよりも個別性を特化したことが考えられる。

註

- 1) 医学の領域においては、20世紀初頭のイギリスで、小児科医G. F.スタイル (George Frederick Still) が、43名の道徳的統制が欠如した子どもの事例について報告している (橋本・福田・森 [2002] 928)。
- 2) 宮本は“exceptional children”の訳語に「異常児」を当てているが (宮本 [2005])、 “exceptional”は少なくとも教育上において必ずしも否定的な意味をもたないため、本論文では原語のまま用いる。
- 3) ドーソンは、生来的な特性から犯罪が発生すると考えていた (Hawes [1971] 213-215)。
- 4) グロスマン校は、開校翌年の1901年にはニューヨーク市ワシントンハイツに移転した (Torek [1910] 14)。興味深いのは、最初の移転に際して、バージニア州リッチモンドの有力者が、同地区への誘致活動を展開したことである (Groszmann School [1907] 4)。バージニア州リッチモンドは、南北戦争時すでに、全白人人口のうちドイツ人の割合が25%に達しており (Dabney [1976] 153)、グロスマンの事業がドイツ系の住民に支持された可能性が示唆される。
- 5) グロスマンの分類によると、仮性の非定型児とは、転校、発達の遅進、一時的な病気、そして軽微な身体的欠陥によって遅れている子ども、普通でない早さで発達する子ども、取扱の困難な子ども、そして放置された子どもであった (Groszmann [1911c] 423)。
- 6) グロスマンは、ドイツの学校や教育者の提唱

20世紀転換期アメリカ合衆国におけるM. P. E.グロスマンの非定型児に対する教育の試みとその実体

- した理論が、世界のモデルとされてきたと評価している (Groszmann [1897a] 2)。たとえば、1890年頃から始まるヘルバルト主義運動は、アメリカの教授理論成立の根幹に直結する重要な役割を果たしたと言われていている (庄司 [1985] 1)。グロスマン自身、創設した私立学校の名称を後に「ドイツの偉大な哲学者である」J. F.ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 1776-1841) に「敬意を表して」、*“Herbart Hall”* と改称している (Anonymous [1911b] 182)。その一方で彼は、ドイツの学校制度に対し、子どもの能力や適性が未明の段階で、教育コースを決定することを批判的に述べている (Groszmann [1917] 4)。
- 7) 「科学」は、ホールによって主導された児童研究運動において不可欠の観念であった。児童研究運動では、子どもの科学的な研究を追求し、究極的にはアメリカの学校教育改革をめざしていた (松岡 [1985] 1)。グロスマン自身、ホールに師事し、イリノイ州児童研究協会の機関誌 (*Child Study Monthly*) に「児童研究の観点からの言語指導」と題する論文を投稿していた (Groszmann [1899])。また、日本において明治末から戦後まで刊行されていた雑誌「児童研究」にグロスマンの文献が紹介されていたことも (文学士KH [1922] 83)、彼が児童研究と深い関りがあったことを示すものであるといえる。
- 8) グロスマンの分類によると、欠陥児とは、てんかん、盲、聾啞、奇形、麻痺、そして不具 (*crippled*) であった (Groszmann [1911c] 423)。
- 9) 実際に、グロスマンは *exceptional children* の分類を試みている (Groszmann [1911c])。彼の分類は、1903年に、犯罪人類学の創始者であるイタリアのC. ロンブローゾ (Cesare Lombroso 1836-1909) から高く評価され、1909年に改訂版が *Bulletin of the American Academy of Medicine* に掲載された (Groszmann [1909]; [1913] 767)。
- 10) エアーズは1911年に、ビネーシモン知能尺度を、「言語能力を強調し、初歩的な学業を測定しているのであって、生来の能力を査定できない」 (チャップマン [1995] 35) と批判している。
- 11) 1920年代には、ビネーシモン知能尺度を改訂し、スタンフォード・ビネ知能検査を開発したL. M. ターマン (Lewis Madison Terman 1877-1956) と、ジャーナリストであったW. リップマン (Walter Lippmann 1889-1974) による激論が起こる (グールド [1989] 213-222; ラヴィッチ [2008] 151-153)。
- 12) グロスマンは、自身の著書の中で、グロスマン校で試験された子どもの見本を示している (Groszmann [1917] 712-718)。その中には、劣悪な家庭環境、栄養失調、学業不振、言語の問題、視覚的・聴覚的記憶の欠陥、視力の低下、片耳難聴、扁桃腺肥大、アデノイド、歯の欠陥といった症状を示す子どもが記載されている。
- 13) NASEECは、1905年3月に結成され、グロスマン校の運営を継承した。
- 14) 観察クリニックとは、NASEECによれば、最終的に正常の範囲内までに回復する欠陥か、永続的な欠陥かを、広範な観察によってのみ判定されうる境界域の事例を処置し研究するための機関である (Anonymous [1911a] 174)。
- 15) たとえば、イリノイ州シカゴの公立学校は子どもや両親の生年月日、学業成績、そして身長、体重、視覚、聴覚、筋肉といった基本的な身体的状態を調査していた (*Report of the Commissioner of Education* [1902] 1095-1096)。
- 16) グロスマン校では、個別的指導と集団的指導を組み合わせることで、両者がもつ欠点の回避を意図していた。同様のことは、精神薄弱児を対象とした特殊学級においても考えられていた (米田・本間・長塚 [2008] 101-102)。
- 17) グロスマンの教育実践は、E. O.セガン (Edouard Onezime Seguin) の生理学的教育と類似性をもつものであった (トレント [1997] 88-96)。
- 18) グロスマンは、早期診断と早期教育を重視していたため、教育学と医学の専門家が子どもを家庭から分離することを求めたとき、親はすぐに同意する必要があると考えていた (Groszmann School [1909] 11)。
- 19) グロスマンが、NEAの1910年大会の特殊教育部会に州や地方自治体の義務教育法の修正、発展、拡大に関する委員会を設置したことは、その一環であった (Groszmann [1910d] 1034; [1912a] 261)。
- 20) NASEECの1911年年次会議の会議録には、グロスマン校の10周年を祝した書簡が掲載されたが、書簡を寄せた人物には、連邦内務省教育局のP. P. クラクストン (P. P. Claxton) や、1911年のNEA会長でミルウォーキー教育長であったC. G. ピアス (Carroll G. Pearse)、マサチューセツ

州精神薄弱施設長であるW. E.ファーナルド(Walter E. Fernald 1859-1924)なども名を連ねていた。

引用文献

Abbreviations

NEA: Journal of Proceedings and Addresses of the National Education Association; NASEEC: Proceedings and Addresses of the National Association for the Study and Education of Exceptional Children

Anonymous (1911a) Activities of the National Association for the Study and Education of Exceptional Children. *NASEEC*, 174.

Anonymous (1911b) Change of Name of the Association's School. *NASEEC*, 182.

Anonymous (1912) National Association for the Study and Education of Exceptional Children. *The Study of Individual Children*, 75-76.

荒川智 (1988) 障害児教育運動との関係で. 長尾十三二 (編), 新教育運動の生起と展開. 明治図書, 163-181.

文学士KH (1922) 異常児童 ドクトル グロースマン述. 児童研究, 26(2), 83.

Chapman, P. D. (1988) *School as Sorters Lewis M. Terman, Applied Psychology, and the Intelligence Testing Movement, 1890-1930*. New York University Press. 菅田洋一郎・玉村公二彦監訳 (1995) 知能検査の開発と選別システムの功罪—応用心理学と学校教育—. 晃洋書房.

Dabney, V. (1976) *Richmond the Story of a City*. Doubleday & Company, Inc.

Doll, E. E. (1967) Trends and Problems in the Education of the Mentally Retarded: 1800-1940. *American Journal of Mental Deficiency*, 72(2), 175-183. 紀要編集委員会 (1969) 精神薄弱教育における傾向と問題, 1800-1940. 精神薄弱問題史研究紀要, 7, 60-71.

富士川游 (1909) トリュューベル氏教育院. 児童研究, 13(1), 20-22, 60-61, 107-109, 138-139.

Gould, S. J. (1981) *The Mismeasure of Man*. W.W.Norton. 鈴木善次・森脇靖子訳 (1989) 人間の測りまちがい. 河出書房新社.

Groszmann, M. P. E. (1897a) *The Common School and the New Education*. C. W. Bardeen, New York.

Groszmann, M. P. E. (1897b) *A Working System of*

Child Study for Schools. C. W. Bardeen, New York.

Groszmann, M. P. E. (1899) Language-Teaching from a Point of Child-Study Point of View. *Child Study Monthly*, 4, 266-278.

Groszmann, M. P. E. (1904) To What Extent may Atypical Children be Successfully Education in Our Public Schools? *NEA*, 43, 754-759.

Groszmann, M. P. E. (1906) The Training of the Mentally and Morally Defective Child. *Bulletin of the American Academy of Medicine*, 9, 1-9.

Groszmann, M. P. E. (1908) How to Dispose of Exceptional Children. *School Exchange*, 3(1), 31-37.

Groszmann, M. P. E. (1909) Classification of Exceptional Children as a Guide in Determining Segregation. *Bulletin of the American Academy of Medicine*, 10, 449-460.

Groszmann, M. P. E. (1910a) What Consideration should be Given to Subnormal Pupils? *NEA*, 48, 160-166.

Groszmann, M. P. E. (1910b) Discussion. *NEA*, 48, 323.

Groszmann, M. P. E. (1910c) Danger-Signals in Young Children. *NEA*, 48, 874-881.

Groszmann, M. P. E., Farrell, E. E., & Taylor, H. (1910d) To the Department of Special Education. *NEA*, 48, 1034.

Groszmann, M. P. E. (1911a) The Backward Child vs. the Feeble-minded Child. *NASEEC*, 73-81.

Groszmann, M. P. E. (1911b) Legal Provisions for Exceptional Children. *NEA*, 49, 1070-1077.

Groszmann, M. P. E. (1911c) Tentative Classification of Exceptional Children. *California State Journal of Medicine*, 10, 423-424.

Groszmann, M. P. E. (1911c) *The Career of the Child*. Richard G. Badger, Boston.

Groszmann, M. P. E. (1912a) Progress of the Movement for the Benefit of the Exceptional Child, in the Year 1912. *Report of the Commissioner of Education*, 257-262.

Groszmann, M. P. E. (1912b) *The Study of Individual Children*. National Association for the Study and Education of Exceptional Children, NJ.

Groszmann, M. P. E. (1913) Exceptional Children : WHY? *NEA*, 51, 767-772.

Groszmann, M. P. E. (1914a) President's Address.

20世紀転換期アメリカ合衆国におけるM. P. E.グロスマンの非定型児に対する教育の試みとその実体

- NEA, 52, 829-830.
- Groszmann, M. P. E. (1914b) Adaptation of the Work of the Kindergarten of the Needs of Individual Children. *NEA*, 52, 406-413.
- Groszmann, M. P. E. (1914c) The Work of National Association for the Study and Education of Exceptional Children. *NEA*, 52, 843-844.
- Groszmann, M. P. E. (1917) *The Exceptional child*. Charles Scribner's sons.
- Groszmann School an Association not for Pecuniary Profit, Incorporated under the Laws of the State of New Jersey on March Fourteenth, Nineteen Hundred and Five. 1907.
- The Groszmann School for Nervous and Atypical Children. 1905.
- Groszmann School for Nervous and Atypical Children. 1909.
- 橋本俊顕・福田邦明・森健治 (2002) II. 注意欠陥多動障害 (ADHD) 概論－歴史的背景. *小児科診療*, 65(6), 927-932.
- Hawes, J. M. (1971) *Children in Urban Society*. Oxford University Press.
- 本間貴子・高野聡子・宮内久絵・長塚修一・佐々木順二 (2007) ヴァインランド精神薄弱者施設草創期における総合施設から教育・訓練専門施設への転換とその意義－創設者S. O.ギャリソン施設長時代 (1888-1899)－. *障害科学研究*, 31, 41-56.
- 木原孝博 (1965) アメリカ新教育運動史の研究 (3), *岡山大学教育学部研究集録*, 20(1), 17-35.
- Klein, A. (1977) *Felix Adler's contributions to experimental education*. New York University.
- 松岡信義 (1982) アメリカの児童研究運動 (Child Study Movement) —その思想と性格—. *教育学研究*, 49(4), 353-362.
- 松岡信義 (1985) 児童研究運動における「科学」観の検討(1). *美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要*, 30, 1-11.
- Matzner, P. (1910) A Former Pupil. *NASEEC*, 5.
- 宮本健市郎 (1998) フレデリック・リスター・パークの教育思想における自発性の原理—児童研究と進歩主義教育の間—. *教育学研究*, 65(2), 141-150.
- 宮本健市郎 (2005) アメリカ進歩主義教授理論の形成過程. 東信堂.
- The New York Times, February 23 1893.
- The New York Times, October 4 1922.
- 岡田英己子・津曲裕次 (1986) ドイツ児童研究の成立とHeilpädagogikの学的体系化 (1). *心身障害学研究*, 10(2)47-57.
- 岡田英己子 (1993) ドイツ治療教育学の歴史研究. 勁草書房.
- Ravitch, D. (2000) *Left Back: A Century of Battles Over School Reform*. Simon & Schuster. 末藤美津子・宮本健市郎・佐藤隆之訳 (2008) 学校改革抗争の100年. 東信堂.
- Report of the Commissioner of Education (1902) Child Study in Chicago. 1095-1138.
- Report of the Commissioner of Education (1916) Special Institutions for Backward and Nervous Children-PART I, PART II. 658-659.
- Richardson, J. G. (1999) *Common, delinquent, and special: the institutional shape of special education*. Falmer Press, New York, 110-115.
- Schmitt, A. E. (1911) The Needs of Our Movement for the Realization of its Aims. *NASEEC*, 1-6.
- 庄司他人男 (1985) ヘルバルト主義教授理論の展開—現代教授理論の基盤形成過程—. 風間書房.
- Torek, F. J. A. (1910) The History and Aims of the National Association for the Study and Education of Exceptional Children. *NASEEC*, 13-17.
- Trent, J. W. Jr. (1995) *Inventing the Feeble Mind: A History of Mental Retardation in the United States*. University of California Press, Berkeley. 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男 (1997) 「精神薄弱」の誕生と変貌：アメリカにおける精神遅滞の歴史 (上). 学苑社.
- Wallin, J. E. W. (1914) *The Mental Health of the School Child*. Yale University Press.
- 米田宏樹・本間貴子・長塚修一 (2008) 精神薄弱学級教員養成の着手と教育内容・方法の模索. 岡典子 (研究代表者) 20世紀特殊学級における統合と排除の両義性とインクルーシブ教育の源泉. 平成17-19年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書, 86-109.

— 2009.8.31 受稿、2010.1.21 受理 —

Historical Study on Education for Atypical Children Experimented by M. P. E. Groszmann in the Turn of the 20th Century in the United States

Ryo YOSHII

This study examines the educational experiment on atypical children which M. P. E. Groszmann conducted in the turn of the 20th century in the United States. Groszmann established his own private school for atypical children based on his experience of research and practice because he had not considered the public school system an effective one for these children. Groszmann intended to make them useful and effective members of the society. In addition to the educational functions, he utilized his school as a research institution to develop the educational model for atypical children. Groszmann provided the education to atypical children whose trouble had been considered to be caused not by genetic factors but by environmental factors. The children were provided with not only the education designed based on individual needs, but also the physical and mental cares controlled by school staff including physicians.

Key Words: Maximilian Paul Eugen Groszmann, atypical children, private school, the United States